

第70回京都市廃棄物減量等推進審議会
第1回循環型社会施策推進部会
摘録

【日時】令和5年3月27日（月） 午後4時30分～午後6時10分

【場所】職員会館かもがわ 3階 大多目的室

【出席委員】

（会場参加）上田委員、酒井委員、崎田委員、鷗鷗委員、佐藤委員、下村委員、中尾委員、
宮崎委員、矢野委員、山川委員、山下委員、山田委員、山根委員

（オンライン参加）浅利委員、有地委員、西田委員

【欠席委員】有元委員、在間委員、島藤委員、田村委員、豊田委員、堀委員

I 開会

委員20名中 14名の出席で過半数を超えているため、京都市廃棄物の減量及び適正処理等に関する規則第37条3項に規定する定足数を満たしていることを確認。

II 議事1：京・資源めぐるプランの進捗状況【資料1、3】

（事務局）

資料1（「京・資源めぐるプラン」の進捗状況報告書）、資料3（環境政策局予算の概要（令和5年度））に基づき説明。

（矢野委員）

使い捨てプラスチック排出量について、家庭系と事業系の両方が含まれていると思うが、その内訳を教えてください。また、こういったものが多く含まれており、こういったものをターゲットとするかなど、戦略的に取り組むことが重要であり、現時点で把握していることや今後の予定を教えてください。

レジ袋に占めるバイオマスプラスチック製品の割合について、重量ベースと枚数ベースのいずれであるか教えてください。

京都市が集めた資源ごみは、民間に引き渡されているが、最終的にしっかりリサイクルされているかどうかといったトレーサビリティも意識していただきたい。更に、繊維類の場合は、リユース、リサイクルのいずれの場合もあり、それぞれの割合も把握する必要がある。そのうえで、市民にフィードバックしていただきたい。取り組まれている施策が幅広いが、それぞれの検証とフィードバックについても心がけていただければと思う。

（事務局）

使い捨てプラスチック排出量の家庭系と事業系の割合は、概ね6対4程度である。家庭系については、レジ袋をはじめとする容器包装などの発生抑制が重要であり、加えて、令和5年度から始まるプラスチック製品を含めた分別回収にも力を入れていく。事業系については、プラスチックをしっかりと分別いただくことが重要であり、周知啓発や搬入物検査（開封調査）に基づく指導な

どを引き続き進めていく。

レジ袋に占めるバイオマスプラスチック製品の割合は、重量ベースである。

資源物の行き先については、本市が収集したプラスチックなどは容器包装リサイクル協会を通じて、適切にリサイクルされていることを確認しているが、その他、売却している資源ごみを含め、その行き先や処理方法をしっかり意識していく必要がある。

（有地委員）

特定プラスチック使用製品とは具体的にこういったものか。

（事務局）

プラスチック資源循環促進法令で定められた「特定プラスチック使用製品」で 12 品目のことである。

（佐藤委員）

使い捨てプラスチック排出量について、2030 年の数値目標がないのはなぜか、また、目標を立てる予定はないか教えていただきたい。

（事務局）

対象となるプラスチックの定義、実態把握の手法等を随時検討しながら、モニタリングしていくこととしており、プランの中間見直し時に改めて数値目標を検討する予定である。

これまでは主に容器包装が削減の対象であったが、容器包装以外の特定プラスチックなどの使い捨てプラスチックを含め、今後どのように削減していくか検討していく必要がある。

（崎田委員）

矢野委員発言の検証とフィードバックに加え、いい取組は是非広げていただきたい。特に食品ロスとプラスチックは、CO₂の観点からも重要であり、京都市は非常に積極的に取り組んでおられるため、その中でも効果があると判断した取組については、市全体に広げていただきたい。

具体的には、食品ロスについて、市民アンケートでは、てまえどりを実践している人の割合が 20%以下とまだ低いことがわかっている。賞味期限・消費期限の長い商品を奥からとるのは、これまで消費者の知恵とされてきたが、「すぐに食べるものであれば、手まえから取ろう。それによってお店の食品ロスが減る」という消費者の意識変化やお店との連携の形が見えてきたところである。そういったことを資料に明確に書くなどし、その取組がなぜ良いかをわかりやすく示すことが重要である。

プラスチック製容器包装の分別について、アンケート結果では、「分別対象がわからない」と回答した方が 35%程度おり、今回、プラスチック製容器包装とプラスチック製品を一括収集するという判断は非常に良いと思う。これを機会に、プラスチックをなぜ資源化するのか、どのように資源化するのかといったことを明確に市民にお伝えいただきたい。

（事務局）

てまえどりについて、それによってこういったことが起こるのかを伝えるとともに、それによ

って社会が変わっていくといったこともしっかりとお伝えしていきたい。

（山下委員）

市は移動式拠点回収の実施回数を増やしており、市民にもだいぶ定着してきているように思うが、ごみ分別案内アプリ「さんあ〜る」では、移動式拠点回収のHP のリンクが貼られていて日時をまとめた pdf が見られるだけであり、わかりづらい。そのため、カレンダー機能に直接表示するといった工夫ができると良いと思う。

事業者報告制度について、罰則の適用事例がないようであり、企業としても、改善勧告や罰則といった制度では、取り組む意識が働きづらい側面がある。次のステップとして、表彰や認証といった制度につなげていただければ、企業も積極的に取り組む意識につながると思う。

（事務局）

「さんあ〜る」について、2 月から配信を開始したところであり、現在試行錯誤しながら改善を進めている。どこまで対応できるかわからないが、皆様への情報発信のツールとして、しっかりと情報発信し、皆様に様々なことを知っていただけるようになればと思う。

事業者報告制度について、本市の表彰制度があるので活用するとともに、表彰に限らず、様々な手段で、事業者の取組を情報発信していければと思う。

（中尾委員）

数値目標の進捗状況について、「順調に推移している」といった表現が散見されるが、開始当初は効果が出るが、後半で頭打ちとなる場合が多いため、最初はもう少し厳しめに評価すべきだと思う。例えば、食品リサイクル率について、令和3年度は基準年度と比べると4ポイント向上しており、「順調」としているが、令和2年度と比べると横ばいである。厳しい言い方になって恐縮だが、安易に「順調」という表現が使われているように感じており、少し危惧している。

市は様々な施策に取り組まれており、素晴らしいと思うが、これらの施策に関心を示すのは、ある程度環境問題に意識の高い方がほとんどだと思う。ごみを多く排出しているのは、意識の低い方々であり、そういった方々に対する施策が不十分のように感じている。そういった意識の低い方々に対しては、環境のことを前面に出して訴えても響かないので、少し切り口を変え、環境ではなく、お金の節約といった視点を前面に押し出すなどし、結果として、施策の目標を達成できれば良いと思う。

（事務局）

「順調」という表現について、皆様に様々な取組を実施していただいております、そのアピールもかねてこういった表現にしている側面もあるが、市として現状で十分とは考えておらず、引き続きしっかりと取組を進めてまいりたい。

（下村委員）

レジ袋について、「買い物時にレジ袋を貰う必要がないのに受け取ってしまうことがある店」として、消費者にアンケートを実施しているが、気が付かないうちに商品をレジ袋に入れられ、受け取ってしまう場合もある。こういったケースでは、事業者側の視点も大切であり、事業者側か

ら、減らしづらい要因やどうすれば減らしていけるかなどの情報収集をされていれば、教えていただきたい。

バイオプラスチックの排出について、生ごみ堆肥化の場合のようにすぐ自然に還るといった勘違いをされている方もいらっしゃるが、市としては、増えることを良しと見るのか、それとも、減らしていくべきと考えているのか、見解を教えていただきたい。

（事務局）

特定レジ袋について、有料化対象外であり、最初から商品が特定レジ袋に入れられて販売されている場合があることは、我々も課題認識している。今後、それらの実態をしっかりと把握・分析したうえで、対策を進めていきたいと考えているが、現時点で、事業者側から何か情報を得ているといった状況にはない。

プラスチックについては、本来的には発生抑制が最も重要だと考えている。一方、どうしても使わなければならないプラスチックも一定数ある中、そういったものについては、バイオプラスチックや再生材の活用を進めていくべきと考えている。

（酒井会長）

どうしても使わなければならないプラスチックへのバイオプラスチックの活用については、生分解というよりは、脱炭素や化石資源からの脱却という視点で重要であり、そういった観点から、その量や割合を増やすことは決して悪いことではない。ただし、その前提として、使う必要がないプラスチックについては、減らしていく必要がある。

（山根委員）

ごみ搬入手数料等検討部会では、「処理料金を上げれば、排出者はごみを減らしたり、リサイクルに回したりしようとする」という意見が多くあった。市民でもそういった意識をお持ちの方が多いように思うので、レジ袋についても、値段を高くすれば受け取る人も少なくなると思う。便利だからこそ受け取ってしまうが、不便にも慣れていく必要があり、便利をとるならそれ相応の値段を支払わなければならないようにすれば良いと思う。これはあらゆることに当てはまることであり、ペットボトルや使い捨てプラスチックも同様である。

プラスチックごみ分別実施率について、市民は分別しなければならないことを何となく理解はしているが、分別が不十分なごみでも収集されている実態があり、市が徹底して残置・調査するといったことも個人情報等の観点から難しいため、分別を進めるのはなかなか難しいように思う。

食品リサイクルについては、リサイクル施設が市内にないので難しい。また、リサイクル料金が 30～40 円/kg 程度に対し、市の処理料金は（処理費用の観点から）最大でも 20 円/kg 程度であり、今回の改定でも 15 円/kg であるため、リサイクルした方が費用がかかる。事業者が環境配慮を PR するために取り組むのはよいことだと思うが、費用面でメリットがない。こういったことを皆が理解したうえで、一致団結して取り組まなければ進まないと思う。

（事務局）

プラスチックについて、ここ 2 年は、プラスチック製品の分別回収に注力してきたところであるが、使い捨てプラスチックやバイオプラスチックなど、今後具体的にどのように対策を進めて

いくのかもう少し検討が必要である。また、分別実施率についても 60%に近づけるための取組が必要だと考えている。

食品リサイクルについては、ごみ搬入手数料等検討部会でも同様の御指摘をいただいております、それらの課題を踏まえて、今後どうしていくか検討していきたい。

（酒井会長）

マイボトル推奨店の数は飽和状態と見るのか、それとも、まだ、増やす余地はあるのか紹介いただきたい。

（事務局）

マイボトル推奨店は、大手コンビニやチェーン店などにこれまで加盟いただき、数を増やしてきたところであるが、そういったお店でも機械の入れ替えによりマイボトル対応できなくなるといった事例も発生している。大手以外のチェーン店等を含めてお声がけしているが、なかなか一歩踏み込んでご対応いただけないお店もある。マイボトル対応等の民間の情報もある中、そういった情報もチェックしながら進めていきたい。

（浅利委員）

ペットボトルの目標は日本一だと思うので、取組も日本一にしていく工夫が必要だと思っております、我々も次年度以降しっかり関与していければと思う。

また、資料として、広報資料が添付されているが、報道を通じて初めて知ることもあるため、今後はリリースと合わせて委員に共有いただければありがたい。

地域ごみ減量推進会議について、テコ入れが必要であり、次年度以降、取り組んでいただければと思う。

（酒井会長）

レジ袋についても、早い段階から先進的に取り組んでいただいていたが、それを上回る高い目標を設定しているところであり、今後、ペットボトルとセットで取り組んでいただければと思う。

（酒井会長）

プラスチックの削減に係る話として、佐藤委員から話題提供いただけるとのことなので、よろしくお願いします。

（佐藤委員）

「くるん京都」という小さな市民グループの活動に関わっており、紹介させていただく。

「くるん京都」はごみを生まない 2R な「買い物」を当たり前にしたいという思いから約 2 年前に発足したボランティアな集まりである。

プラスチックごみが増えている実態を問題視し、最初に取り組んだのは、マイ容器が使える、ごみを出さずに買い物ができるお店を集めたマップの作成である。同様のマップ作成は他の団体も取り組まれており、コロナ禍の同時期にいくつか立ち上がっている。また、ごみに関する勉強会を開いたり、SNS で発信するなど、生活者に 2R の啓発を行ってきた。

しかしながら、エコなことを発信してもエコな人にしか伝わらず、あまり広がらずに手応えがなかったため、少し作戦を変えてみた。容器包装を減らしたいと思っていてもなかなか消費者に伝えられず、消費者も欲しがっているから仕方ないと思っているお店の方のために、マイ容器が利用可能であることを記載した木製のプレートを作成し、配布した。このプレートによって、意識が高くない人にもマイ容器を使えることに気付いていただくきっかけとなり、メディアにもとりあげられ、少しずつ認知が広がってきていると思う。

ただ、それだけでもまだ十分ではないと考え、さらに一步踏み込むために、事業者直接向きかけることとし、小売業を対象としたセミナーを開催した。量り売りをしている斗々屋を講師として招き、ごみを減らしたいがどうしたらよいかわからないお店の方々の、経営面や衛生面やお客様の反応などといった様々な疑問に答えていただいた。また、消費者と小売店の対話の場になるようなセミナーにした。セミナーの中では、斗々屋のごみの量などのデータを示していただき、ごみを減らせば処理費用がかからず、経営的にもメリットがあるといったことを説明いただいたほか、海外の裸売りの事例や、プラスチックの容器包装にもお金がかかっており、それをやめることの経営的なメリットなども話題にあがった。パネルディスカッションに登壇いただいたスーパーは、2店舗で年間1,800万円もの包装資材を購入しているという具体的なデータを挙げ、その費用と包装の手間を抑えたいとして、斗々屋の話に刺激を受けていた。また、その1,800万円という金額に消費者も驚いていた。このように、エコ感を出すとエコな人しか集まらないため、なるべくそういった空気感を出さないように工夫しながら、ごみを生まないことの経営上のメリットを伝えるということに注力した。この作戦は大成功だったと思っている。

また、セミナーでは、お店の人にとっては当たり前かもしれないが、消費者には一般的に知られていない食品トレーの値段について取り上げ、その値段の高さに私自身も驚いた。また、セミナーを通じて、小売店も非常に悩んでいるということに気付いた。あるお店の人が、「コストを上げてまで、発泡トレーから紙トレーに変えたが、発泡トレーの場合は水平リサイクルされるのに対し、紙トレーの場合はワンウェイになってしまうので、本当に環境負荷が低いかわからない」と話していた。こういった話は、他でもよく聞く話であり、容器包装でも、紙とプラスチックの両方が使われているもの、プラスチックだけのもの、プラスチックと紙の複合素材のものなど様々なものがあり、どの容器包装の環境負荷が低いかわからないまま選んでいるようである。

こういったことを踏まえて少し提案させていただく。事業者に啓発する場合、エコ以外の2Rのメリットを具体的に伝えることが重要だと思う。また、容器包装の環境負荷を数値化したり、指針を示したりすることを検討してはどうかと思う。更に、2Rを推進する事業者が「トクする」仕組みがなければ大きく進まないと思うので、インセンティブを与える、または、容器包装に対する京都独自の規制を設けるといったことなどを検討してはどうかと思う。また、市民に対しては、容器包装の金額を明記するなどし、買い物の度に、かなりのお金を出してごみになる容器包装を買っていることに気付いてもらい、行動変容を促すことができないかと思う。こういったことを、議論のテーマとして取り上げていただければ幸いである。

（中尾委員）

紹介いただいた容器包装の話のように、日本では当たり前であっても、海外ではそうではないことも多くある。例えば、スーパーで買うお刺身には、つまなど色々なものが添えられているが、海外では当たり前ではなく、「刺身を買いたいのであって、つまなどの余分なものは必要ない」と

お怒りになられる外国人の方もいらっしゃるという話を聞いたことがある。おそらく、つまを食べない方も多くいらっしゃる、食品ロスになっているのではないかと思う。日本人は外国人から指摘されたり評価されたりすることに敏感なように思うので、「海外では非常識」といった切り口で啓発するののも一つの手だと思う。

（宮崎委員）

プラスチックのトレイから紙トレイに変えていくことは良いと思うが、どの程度のコスト増となるのか。

（佐藤委員）

1 個あたり、プラスチックのトレイが 6 円程度であるのに対し、紙のトレイは 17 円程度である。プラスチックのトレイは水平リサイクルされるのに対し、紙のトレイは防水加工されているため、京都市のルールでは、雑がみでは回収できず、燃やすごみとして出さざるをえず、そういった点も見直していただきたいと思う。

（崎田委員）

最近、大規模な事業者も「何かできないか」と考え、同じリユース容器を繰り返し使う販売や、容器を使わないお店などをチェーン展開する動きも少しずつ出てきているが、どのようにすれば多くの消費者とつながれるか悩まれている。そういった中、消費者側から呼びかけ、対話の場を広げる取組は素晴らしい発想だと思う。京都市は関心の高い方も多くいらっしゃる都市なので、2R に取り組む小売店を広げていただき、多くの消費者が日々の暮らしの中で取り入れられるようになっていけばと感じたところであり、応援させていただく。

（酒井会長）

2R の小売店は京都市内で現在どの程度あるのか。

（佐藤委員）

現在 70 程度であり、メンバーが 1 店舗 1 店舗足を運び、お店の方と話をしたうえで掲載させていただいている。まだまだポテンシャルがあると考えている。

（酒井会長）

マイボトル推奨店ともウィンウィンの関係があれば、是非連携を考えていただければと思う。また、トレイの環境負荷については、学者側も整理してお伝えしていかなければならないと思う。

（浅利委員）

環境負荷については、処理システムによっても変わってくるので、どのように評価して伝えていくかを研究者として考えていかなければならないと感じた。

また、ヨーロッパでは、当たり前のように環境配慮製品が一角を占めており、そういった風に事業者と連携して消費者に選択肢を見せていくことが大切であり、消費者への環境教育も進めていかなければならないと感じた。

Ⅲ 議事２：今後の主な審議内容について【資料２】

（事務局）

資料２（今後の主な審議内容について）に基づき説明。

（崎田委員）

リサイクルされた後に何に生まれ変わるかを消費者が知ることで、リサイクルの取組が根付くという面があると思う。また、できるだけ近いところでリサイクルし、地域で循環させることが望ましい。そのため、条例の点検・見直しにおいては、リサイクル製品のトレーサビリティが効くような仕組みを考えていただきたい。また、事業者報告制度について、手数料改定に伴い、数年間だけでも、収集・運搬事業者との契約の見直しへの対応状況などを報告内容に組み込むといったことを検討してはどうかと思う。

脱炭素に向けては、プラスチック対策も重要だが、焼却時に必要となるエネルギーを減らすという観点で、食品ロス削減はもちろん、生ごみの水分を減らすなど、生ごみ全体を減らしていくことも重要であり、どのような施策を今後講じていくのかを明確にしていく必要があると思う。

（矢野委員）

条例点検と脱炭素のいずれについても、京都市としてどうしていくかも検討していく必要があり、例えば、条例点検では、市民・事業者の取組とあるが、主体の中に京都市も含めて議論できればと思う。脱炭素についても、近場でのリサイクルという観点で、生ごみのバイオガス化施設を増やすことができるかといったことを含めて議論できればと思う。

（酒井会長）

中尾委員が議事１で発言された、関心が低いマジョリティへの対策についても、この中で議論できればと思う。

Ⅳ 閉会

（山本 環境政策局長）

本日は、年度末の大変お忙しい中、お集まりいただき、感謝申し上げます。

コロナがようやく落ち着いてきており、対面形式での審議とあって、普段に増して活発な御議論をいただき、様々な貴重な御意見をいただいた。重ねて感謝申し上げます。

京・資源めぐるプランを策定して以降、この２年間、委員の皆様から様々な御助言をいただきながら、本日報告させていただいた各種取組を進めてきた。中でも、審議会を中心に御議論いただいたごみ搬入手数料の改定やプラスチック製品の分別回収など、大きな動きもあった。これらを進められたのは、ひとえに委員の皆様のおかげであり、改めて心より感謝申し上げます。

私事で恐縮だが、この３月末を以て退職となり、今回の出席が最後となる。次年度からは、先ほど申し上げたプラスチック製品の回収やごみ搬入手数料の改定及びその価格転嫁、そのほか、大型ごみや持込ごみの事前申込制の導入なども始まる。更に、2030 年度までに CO₂ ゼロを目

指す脱炭素先行地域に認定されたところであり、こちらも来年度から本格的に始動する。

本日御審議いただいたように、引き続き、京・資源めぐるプランに掲げる各種取組を進めることはもちろん、2030年のSDGs目標の達成や、廃棄物・資源循環分野を含めた2050年GHG排出ゼロの実現のため、循環型社会・脱炭素社会の構築に向けて議論し、そして行政・市民・事業者などあらゆる主体が協働して実践し、進めていかなければならない。

環境政策局として、本日いただいた貴重な御意見を踏まえ、引き続き、これらの取組を切れ目なく強力に推し進めていくよう、後任にしっかりと引き継いでいく。

委員の皆様につきましては、引き続き、御力添えいただきますようお願い申し上げますとともに、この間の御礼を申し上げ、閉会の挨拶とさせていただきます。

（事務局）

本日も様々な御意見を頂戴し、感謝申し上げます。

いただいた御意見については、今後の検討につなげていきたいと思う

以上をもって、本日の第70回京都市廃棄物減量等推進審議会及び第1回循環型社会施策推進部会を閉会させていただく。

（閉会）